に限られてしまいます．しかし，学会として電子情報発行の手順を確立することができれば，会員の皆様のご協力によって円滑な運用ができるのではないかと考えます．

「電子情報委員会」は出発してもなかなか歩みの遅い赤ん坊ですが，皆様のご協力をぜひとお願いし，またサーバの運用だけでなく記事の「編集」という基本的な役割を自覚する上でも必要なことではないかと考え，あえてここに書かせていただきました．

最後になりますが，雪氷学会の益々の発展と会員の皆様方のご清祥を祈念し，受賞のお礼とご挨拶としたいと思います．大変ありがとうございました．

なお，菊地氏には病気療養中の処，2012 年 1 月 14 日にご逝去されました．この原稿は体調の良いときを見計らって，早めに書いていただきました．故人の学会への貢献に感謝し，御冥福をお祈りします．

編集委員長　石本敬志

功績賞を受賞して

NPO 法人雪氷ネットワーク　理事　山田知充

過日「日本およびヒマラヤのおける雪氷災害と学会活動への貢献」に対して功績賞を贈呈するとの連絡を受けましたが，当初は特に何か功績賞をいただくようなことをした自覚はなく，学会活動への貢献というのは，支部長として行った北海道支部の改革が評価されたのであろうか？と思っていました．

従来，北海道支部は年配の理事と若手の幹事とで運営されてきました．しかし，この体制では北大低温研の変革などによる時代の変化に対応できなくなっていました．そこで，幹事を廃し，支部の運営に多くの会員の知恵が生かせるように，任期を明確にして適宜交代で広い年齢層から理事にご就任願うこととし，理事が支部事業を分掌して，責任を持って実施する体制へと移行しました．支部の活動資金は支部機関誌「北海道の雪氷」にほとんどが消えてしまい，他の事業に廻す余裕のない状態だったので，これを HP に掲載することで財務状態を改善するなど，関係者の皆さんの理解と協力で，多くを変えてゆくことができました．

その過程で，雪氷災害が起こった時，マスコミや警察・消防など防災関係者から雪氷学会に対し，災害の実態解説や防災方法，雪氷専門家としてのコメントなどを求められる機会に何度も出会いました．これらの要請に適切に応えるためには，災害現場に出かけて専門家の目で実態を把握することが重要です．従来は北大低温研の雪害部門が担っていた役割を，雪氷学会道支部が担う必要が出てきたようでした．そこで，4 年前の初冬（2007 年 11 月）に「雪氷災害調査チーム」の創設に踏み切りました．雪氷災害一般が対象ですが，ただ雪崩災害については，災害現場が雪崩研究者にはアクセス困難な山岳地帯が多いこと，雪崩跡が時間と共に急速に変化するので緊急出動を要することなどから，研究者と冬山登攀の経験者（山岳ガイドほか）からなる調査チームを予め組織しておいて，素早く出動できる体制としました．その結果として，入手困難な現場の良質なデータを得ることが可能となりました．

当日，受賞理由を伺い，上記支部活動が受賞の理由の一つになっていること，加えてヒマラヤにおける氷河湖研究に対しても評価していただいたことは，大変嬉しく，光栄に思う次第です．

私の研究生活を振り返りますと，専門分野を定

めて倦まず弛まず精進を重ね，学の蘊奥を極めるというよりは，興味に任せて研究対象が替わり，科学とは本来人間の知的好奇心の発露であるとはいえ，そのたびに一から始めることになりました．氷河湖の研究もそうで，ヒマラヤが好きで氷河研究を続けてきた延長線上に，雪氷分野で初の国際協力事業としてヒマラヤの氷河湖決壊洪水防除の研究が舞い込み，ネパールに派遣され新たに始めたものでした．その研究成果が 1998 年度の雪氷学会学術賞として評価されたうえ，今回はまた功績賞として評価していただきました．興味の赴くままに研究できた上にお褒めを頂戴するとは，何と幸せな研究生活を送ることができたことかと，神仏に深く感謝したい心境です．

これを支えていただいた諸先輩，同僚，学生，友人，知人，現場で助けてくれた多くの人々，そして我が山の神にも深甚なる謝意を表します．